# 平成３０年度　石川県立盲学校　自己評価計画書（中間評価）

| 重点目標 | 具体的取組 | 主担当 | 評価の観点 | 実現状況の達成度判断基準 | 判定 | 分析及び今後の取組 | 判定基準 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| ①授業力の向上 | ・授業参観や授業整理会等を通して授業改善を行う。<br>・各自の授業を振り返り、授業改善に活かすために、授業の内容や児童生徒の様子・評価等を記録する。 | 教務課 | 【成果指標】<br>授業改善に取り組み、授業力が向上する。 | 各自の授業力が向上し、児童生徒の学力も向上したと感じる教員の割合が<br>A：　８０％以上<br>B：　６０％以上<br>C：　５０％以上<br>D：　５０％未満 | A<br>84％ | 小８８％、中普７８％、理８８％、全体では８３％であった。アンケート５項目のうち「視覚障害教育の専門性」「新学習指導要領への対応」「生徒からの発問に関しての説明」の項目に関しては向上したが「教材教具の活用」については伸び悩んだため学部毎に教材・教具活用の学習会を開く。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| | | | 【満足度指標】<br>保護者、理療科生徒が授業に満足している。<br>保護者アンケート | 授業が工夫されており、わかりやすいと感じる保護者や理療科生徒の割合が<br>A：　８０％以上<br>B：　６０％以上<br>C：　５０％以上<br>D：　５０％未満 | A<br>88％ | 小保護者、中普保護者がそれぞれ１００％、理療科生は７９％であり、全体では８８％であった。理療科では講義中心の授業であっても、図や模型を活用したり、テキスト及びプリント等を準備したりしていく。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| ②キャリア教育の推進 | ・集団の中での学びを通して、各自が卒業後を考え、人間力を高めていくために、他校や関係機関との交流活動を更に充実し、卒業後につながる体験活動を行う。 | 全学部<br>寄宿舎 | 【努力指標】<br>目標に応じた交流活動を、計画的に実施する。 | 交流の目標回数に対しての達成率が<br>A：　８０％以上<br>B：　６０％以上<br>C：　５０％以上<br>D：　５０％未満 | C<br>51％ | 年間目標の達成率は小４９％、中普６４％、理４４％、寄４４％、全体では５１％であった。猛暑や大雨のため計画した交流が実施できないこともあったが、前期で年間目標回数の半分近くを実施することができた。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| | | | 【満足度指標】<br>保護者、理療科生徒が交流活動に満足している。<br>保護者アンケート | 交流活動に満足していると回答した保護者や理療科生徒の割合が<br>A：　８０％以上<br>B：　６０％以上<br>C：　５０％以上<br>D：　５０％未満 | A<br>90％ | 小１００％、中普１００％、理８６％、寄８３％であり、全体では９０％であった。交流のねらいに応じた内容を実施するために、事前打ち合わせシートを改善し、相互理解を明確にして活動していく。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| | ・行事や日常生活を通して、主体的に挨拶する態度を身につける。 | 指導課<br>全学部<br>寄宿舎 | 【成果指標】<br>主体的に挨拶を行う。 | 自発的に挨拶することや他者と積極的に会話できるようになったと回答する児童生徒の割合が<br>A：　８０％以上<br>B：　７０％以上<br>C：　６０％以上<br>D：　６０％未満 | C<br>68％ | 小２５％、中普３３％、理８６％、寄８６％であり全体では６８％であった。小中普では一人一人の目標が異なる。目指す目標が高いがゆえにまだ目標に達していない児童生徒が多い。自発的に挨拶することが定着するよう挨拶週間を設け、主体的に挨拶する態度を育成する。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| | ・接遇マナー研修や進路を考える会を通してコミュニケーションの能力の育成を図る。 | 理療科 | 【成果指標】<br>研修等で学習した内容について、各生徒が目標を立て実践する。 | 目標を達成した生徒の割合が<br>A：　８５％以上<br>B：　７０％以上<br>C：　５５％以上<br>D：　５５％未満 | B<br>79％ | ５月に研修会を一度開催したが、目標を達成した割合は７９％であった。新入生の意識が低かったことが原因となっていることから言葉遣いやコミュニケーションに関する学習会を再度開き、理療科全体で意識を高めていく。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| ③専門性の向上とセンター的機能の充実 | 歩行指導やロービジョン補助具活用に関する実践力の向上につなげるために、実践事例シートを作成し、研修会等を行う。 | 支援課 | 【努力指標】<br>児童生徒の実態を把握し、個々に応じた指導を行い、成果を教員全体で共有する。 | 実践事例シートを作成し、職員全体で共通理解できた児童生徒の割合が<br>A：　１００％<br>B：　８０％以上<br>C：　７０％以上<br>D：　７０％未満 | D<br>54％ | 歩行指導やロービジョン補助具活用に関する実践は学部ごとに行っているため、現段階では実践事例シートを学部を越えて職員全員で共通理解することは難しい。しかし、職員全体で共有するためにまずは学部内で研修会を開き、年度末には回覧等により職員全体で共通理解を図る。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| | 県内の小中学校からのニーズを踏まえた視覚障害教育に関する研修の開催を県内の小中学校及び関係機関等に広く案内する。 | 支援課 | 【努力指標】<br>ホームページ等を通して視覚障害に関する研修会の開催情報を積極的に発信する。 | ホームページ等を活用して、視覚障害教育の研修会についての情報発信回数が、<br>A：　５回以上<br>B：　３回以上<br>C：　２回以上<br>D：　２回未満 | A<br>7回 | 情報発信を７回行った。外部の方でホームページを見て研修会に参加した方や年間を通して参加する方など、視覚障害教育に関する研修開催の情報発信の成果があった。今後も引き続き講習会等の情報発信を行っていく。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |
| ④業務の効率化 | 各教員が所有する教材・教具を共有し活用しやすくするため、閲覧環境を整備して、教材準備に係る業務の効率化を図る。 | 情報係<br>全学部 | 【努力指標】<br>教材・教具を提供し、教員全体で共有して活用する。 | 教員が教材・教具を提供・活用した回数が<br>A：　２０回以上<br>B：　１５回以上<br>C：　１０回以上<br>D：　１０回未満 | D<br>7.4回 | 小学部6.7回、中普8.2回、理7.1回で全体では7.4回であった。本取組開始時期が６月下旬であり、約２か月分の提供であったため提供数が少なかった。単元終了後に教材・教具を提供するなどのルールを設けて回数を伸ばしていく。 | 中間評価がC以下の場合、内容や取組について検討する。 |